
北稜高校

ひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

北稜高校

【Nコード】

N1548V

【作者名】

ひろ

【あらすじ】

北稜高校での学校生活です

第1話

この話は、作者の高校生活を物語です。フィクションとノンフィクションを混ぜ合わせていますので楽しくかければいいなと思っています。

2005年4/8

池田裕樹は北稜高校の体育館に来ていた。入学式が行われるからだ。

この高校は、6クラスあり、自分は1年4組（情報処理科）だ。他のクラスは1組（普通科）、2組（園芸科）、3組（造園科）、5組（商業科）、6組（家政科）となっている。1クラス40名

入学式が始まり、1組から順に体育館に入っていく、校長先生や来賓の話などがあり、入学式が終わり

自分は教室に入っていた。教室の席は名簿順の為、自分は名簿が1番なので窓側の1番前に座った。クラスの中に同じ中学の生徒が2人いたが、周りがかなり静かだったのと女子なためはなしにくかったのもあり、先生が来るの机で待っていた。

数分後に、担任の山富先生が入ってきた。

第2話教室にて

先生が教室に入ってきた。

「挨拶は今日は、初めてだから、先生が行います。
では、起立。一步机の右側に出てください。

礼、
着席。」

と、言って挨拶をした。

では、皆さん改めて、
入学おめでとうございます。

生徒は一応頭を下げた。

まずは時刻紹介してもらいましょう。

では、出席番号1番の浅倉くんからどうぞ。

「はい」

と言って席を立つ

名前は、

浅倉信之助です。

浅倉か新ちゃんてヨロシク。

次は俺だ！

池田裕樹です。呼び名みんなに任せます。

3番サード三位一郎です。野球してます。イチローでヨロシク。
という感じに続けていた。

全員の自己紹介が終わり、俺達は今度の予定と時間割を先生からもらった。

放課後、俺は、図書室に来ていた。
どんな本があるのか、
楽しみだったから…（＾－＾）

図書室に入ってます、俺はまわりを見渡した。

第3話 図書室

俺は、図書室に来ていた。

どんな本があるのか気になってしかたがなかった。
まずは、図書室の受付にいる、先輩に聞いた。

「すみません、ここの図書室には、文庫本は全部で、何冊ありますか？」

輩は、

「約10万冊ぐらい有ります。1回に借りられる冊数は10冊まで、期間は1週間です。」

わかりましたと言って図書室のなかを見回った

俺は、図書室の本を何冊か借りて、教室に戻って見ると、一人だけ残っている生徒がいた。

井上 咲さんだ

俺は井上さんに何してるの？

と聞くと

暇だから教室にただいたただけなんか帰るきがなかったから
池田君は何してたの？

俺は図書室に本を借りに行っていただけだよ

と言って帰る準備を終えた俺は、井上さんに一緒に帰らない？
と聞いた。（ダメというと思うから）

井上さんは

「いいよ。ただし、ハンバーガー奢ってよね！」

俺は

「えっ、なぜに、ハンバーガーなの？」

「なんか食べたい気分だったから、ダメ？」

「うっん、別にいいよ、ただ、気になっただけだから
それはそうと早くいこうよ。」

もうすぐ、閉門の時間だよ。」

「そうね、行きましょうか」

俺たちは近くにあるマックに向かった

第3話

図書室（後書き）

次は、

マックでの二人の会話です

第4話 マック

二人が歩いていて、井上さんの方を見ると以外に可愛いと思ってしまっ

話がないまま、マック到着してしまっ

俺は、井上さんに

「何がいい？」

と聞くと

「照り焼きチキンバーガーのセットにジューシーチキンセレクト2本入りでお願い」

と言ったので、俺は、それと、じぶんの食べたいものを注文した。ちなみに、

俺は チーズバーガーのセットとチキンなんばんを頼んだ。

二人は黙々と食べていた。

俺は心の中で、

井上さんと一緒にいたいそう思った。

井上さんに家はここから真っ直ぐ行けばつくとのことなので送って行くことにした。

井上さんは恥ずかしがっていたけど、それがものすごく可愛かった。

井上さん家まで、

マックから、徒歩10分家についたので二人は玄関の前で別れた

俺は

「井上さん！

メルアド交換しませんか？」

と言い井上さんの返事を待った。

井上さんは

「いいよ。ただし、

私のこと、名前で言うこと！！

私も名前で言うから、

裕樹！」

二人はメルアドを交換した。

第4話 マック（後書き）

入学式の日おわり

第5話 クラスメイト

次の日、今度あるオリエンテーションの班分けを俺たちは決めた。

二泊三日で行われるので、俺は楽しみだ（＾o＾）

今度いくところは、

学校から、約2時間ぐらいかかるところらしい

まあ、それはべつにいいとして

「早く、班決めようよ」

と原口君は言ったので俺たちは、班ぎめをした

1班5名の班で男女混合であること。

俺のクラスは男子10人女子30人の40人なのでこれに

当てはめると、

8班できることになる、しかし、女子の方が圧倒的に多いので

男子は2、3、2、3の4班に分けて残りの4班は女子だけになる
ということだ。

俺は1班になった。俺の他のメンバーは、斉藤俊君、新垣渚、木村
朋美、井上咲の5人

俺は喜んだ（心の中で）

「この班分けの組み合わせになったのも何かの縁だヨロシク」
と俺が言つと、

「ああ、よろしく」

「楽しみましょう」

「よろしく願います」

「よろしく」

とみな口々に言った。

すると、咲がいきなり俺に飛びかかってきて

「裕樹！私、裕樹と一緒にの班になれて良かった」

と言って抱きついて来た。

俺は驚いて

「咲！！！！ちよい、やめろ！学校だぞ」

「良いでしょ、別に減るもんじゃないし」

「そりゃそうだろうが、

少しは考える」

俺はみながこの状況どう見てるのか、すごく気になった

第5話 クラスメイト（後書き）

オリエンテーション編突入です。

第6話 オリエーション 初日

4 / 15 ~ 18 日にかけて行われる1年生にとって、最初のイベントがやってきた。

俺たちのクラスは、集合時間の10分前までには、全員が揃っていた。他のクラスが、まだ揃っていなかったが・・・担任の山富先生が注意事項を言い始めた。

「他のクラスは、まだ、揃ってないが、生徒が揃ったら、簡単な注意事項を言っておくように言われているから、問題ない。」

注意1つめ 班行動だから他の人に迷惑をかけないこと！

2つめ 気分が悪くなったら、すぐに先生か近くの生徒に言って先生を呼んでもらうこと

3つめ 高校生らしい、行動をとること
以上」

と言って、先生は他の先生の所に行かれた。

オレが、周りを見ると、他のクラスの人も全員が揃っていたので、学年主任の田上一馬先生の話があつて、俺たちは、バスに乗り込み目的地の場所に向かった。

バスの中の席は決まっていなかったので、俺は運転席の前から2番目の席の窓側に座った。

俺は、基本的には人と話すことが好きではない。話しかけられれば、話すけど・・・

だから、俺は、I-Podを聞きながら、バスの中をすごしていく。

周りを見ると、俺の隣には誰もいないので、ゆっくり出来た。後ろの神崎真と新庄蓮は話はしているが、うるさくないので、あまり気にしないでよさそうだ。

バスの後ろの方は、わいわいがやがやとうるさくてたまんないやまあいっか、気にしても仕方がない。バスがつくまでおとなしく寝てよう。

誰かの声が聞こえてきた。

「起きて、起きて、池田君起きてよ」

俺の体をゆすって俺は起こされた。

「ふぁー、もう着いたの？」と俺が聞くと

「うっん、まだだよ。」と木村沙織が答えた。

「あのー木村さん、まだ、着いてないならなんで起こしたんですか？」

「えっと、池田君に聞きたいことと相談したいことがあって。」

「まずは、聞きたいことって？」

第7話オリエンテーション初日2

「えっと…、井上さんとは、付き合ってるんですか？」

俺は、やはり、この質問かと思い答えた。

「付き合っていないよ、彼女が、ただ、引っ付いているだけ。まあ、悪い気はしないよ。」

と言った。

木村さんは、

「そうなんだ。でも、端から見ると、あなたたち、かなりお似合いだよ。そのまま、付き合ってるってことでいいんじゃない？」

そうかな〜と俺は、思いつつ

「うん」と答えた。

まもなくして、バスは目的地についた。

まずは、昼飯の準備をし始めた。昼飯は、スパゲッティに野菜スープだった。

俺たちは、2つのグループに分けて、それぞれを作った。

俺と咲は、ちなみに、スープの方だ。

俺たちの班は皆がてきぱき動いたので、他の班の人より早くご飯にありつけた。

他の班の人は、なぜか、四苦八苦してるところや、女子にばかり任せているところもあるみたいで。

俺たちが食べ終わる頃に、他の班が食べ始めた。

第8話オリエントーション初日3（前書き）

久しぶりの更新です。

第8話オリエンテーション初日3

その日の夜、俺は、変な夢を見た。
なんの夢かと言うと、自分でもよくわからない。

内容は、

あまり思い出せない。

また、寝たら見れるだろうと思い俺は、寝た。

次の日の朝、

俺は、なぜか、咲に起こされた。

「おはよう、ひろき」

「おはよう、咲？、てか、なんでいるの？」

「ひろきを起こしたかったから」

訳わかんないしと思いつつ俺は起きた、他の男子からの冷やかしがすごかった。

さてと、目が覚めたので、俺は、顔を洗いにいった。

今日の変な夢は何だったんだろう？と思いつつ顔を洗った。

すると、後ろから咲が、「はい、タオル」と言って渡してくれた。

俺は素直に「ありがとう」と答えて使った。

今日のメニューと言うと、挨拶の基本とかというやつをするみたいだ。

なぜ、挨拶なのかと言うと、一番マナーとして大切なことだということらしい。

まずは、各クラスで、声だしもかねて、挨拶をする。

「おはようございます。」先生が言った。

「おはようございます。」クラスのみんなで言ったが、声が小さかったらしく、

「もう一回。」と注意された。

俺たちはもう一度「おはようございます。」今度は大きな声で言った。

先生は「合格だ。座っていいよ。」と言ってみんなを座らせた。

他のクラスを見るとまだおわっていないようだ。

それだけ俺たちはうまかったんだろうか？と疑問に思う俺でした。

他のクラスも、声だしがすんだらしく、生徒はみな座っていた。

先生方がなにやら、話し合いをしている。

話し合いがすんだのか、1組担任の佐藤次郎先生が言った。

「今から各クラスの挨拶選手権を実施します。」

内容は簡単に言うと、挨拶して一番大きかったクラスまたは、マナーのうまかったクラスの優勝とします。と言っても、これだけじゃ、みんな真剣にやってくれないと思うので、優勝したところには景品が有りますので頑張ってください。」と言った。

2組担任の篠田朋美先生が「各クラスの代表の生徒1人来てください。」

今から順番を決めます。」

順番を決めるのはくじ引きらしい、

くじを引いた結果、

3組↓5組↓2組↓6組↓4組↓1組の順番になった。

俺達のクラスは後ろから2番目なので、なかなかいい位置だと思う。

「みんな頑張ろう」と俺は言った。

「うん」とか「おう」とか口々に言った。

まずは3組からだ、

このクラスは男子のみなので声の大きさでは絶対に敵わないと思うけど、マナーが悪いからなんとかなるかもしれない。

「おはようございます。」とてつもなく、大きな声で言った。次は5組だ。

「おはようございます。」声は劣るけどかなり大きな声で言った。さらに驚いたことに、全員がピシヤリとなっていた。

次次は2組だ

「おはようございます。」こちらも他に負けない位大きな声で言った。このクラスもマナーがしっかりしてた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1548v/>

北稜高校

2011年10月8日13時45分発行